審査の結果の要旨

氏名　渡邊　知映

本研究では、がん化学療法に伴う性腺機能障害に対する妊孕性温存技術として実施されている未受精卵子凍結保存という先進的生殖技術が若年造血器疾患女性患者にもたらす主観的意義とその意思決定の構造をGrounded Theory Approachを用いて明らかにすることを試みたものであり、下記の結果を得ている。

1．若年造血器疾患女性患者にとって未受精卵子保存技術がもたらす主観的意義－『治療後の女性としての生き方の再構築を支える手段』

若年造血器疾患女性患者にとって未授精卵子保存という生殖技術が、単に「妊孕性の温存のための生殖技術の意義」に留まらず、「治療後の女性としての生き方の再構築を支える手段」という社会的心理的意義を有していることが明らかになった。その内的構造について以下の結果を得た。女性患者は、治療によって妊孕性を喪失する可能性を認識しながらも、生きるために《“副作用としての不妊”との折り合い》をつけなければならなかった。そのためには、《『子を産むのがあたりまえ』という女性観喪失の回避》や《治療後の妊娠・出産体験への望み》を模索するために未受精卵子保存に関心を示した。未受精卵子保存技術の有効性が未知数であると理解していても、《やれることはやった納得感》を得ることによって、治療後の女性としての生き方に自己肯定感を得ることを希求していた。このように、がん化学療法を受ける女性が「治療後の女性としての生き方の再構築を支える手段としての意義」を未授精卵子保存に委ねるか、もしくは新たな価値の変換を見出すかによって、未授精卵子保存への関心が異なることが示唆された。

2．未受精卵子保存の試みの意思決定の構造

若年造血器疾患女性患者が未受精卵子保存を試みるプロセスには、主に2つの意思決定の局面が存在することが示唆された。まず、未受精卵子保存に関する情報を得た女性がん患者が未受精卵子保存という技術に対して、『治療後の女性としての生き方の再構築を支える手段』という主観的意義を見出し、関心を示すか否かの局面が示された。第二は、未受精卵子への関心を実行に移すために、様々な影響因子とのtradeoffを行う局面であった。影響因子は意思決定のプロセスを促進する因子と未受精卵子保存を試みるか否かの行動選択への影響因子とに大別された。

《医師の情報共有の積極度》、《“カップルの問題としての不妊”をパートナーと共有》《娘の意向を尊重する実母の支援》といった重要他者との相互作用が未受精卵子保存という技術への意思決定プロセスを後押ししていた。その一方で、挙児可能性が不明なことや情報開示が進まないといった《未受精卵子凍結保存技術の未成熟さ》、《採卵のため

に治療開始が遷延することへの懸念》、感染・出血・疼痛といった採卵に伴う身体的負担や凍結保存に伴う経済的負担といった《採卵・凍結保存に伴う負担》などの未受精卵子保存技術がもつ不確実性が未受精卵子保存技術への行動選択の障壁となっている構造が示唆された。

以上、本論文はがん化学療法に伴う性腺機能障害に対する妊孕性温存技術として実施されている未受精卵子凍結保存という先進生殖技術が若年造血器疾患女性患者にもたらす主観的意義とその意思決定の構造を明らかにした。本研究の課題は国内外でも先行研究の蓄積が乏しく、本研究から明らかになった知見は、若年がん患者の長期的サバイバーシップに対する先駆的な支援のあり方に重要な貢献をなすと考えられ、学位授与に値するものと考えられる。